

# 戦争中の中学時代の思い出

緒方 博丸

1936（昭和11年）年2月26日、私が5歳になったばかりの時、この頃は雪の多い年でした。朝6時頃おしっこがしたくて、雨戸をあけて、廊下から下に積もっている雪をめがけて渦を巻くようにおしっこをして、雪を黄色くしている時に、荻窪方面でドドーンという大きな音がした。父は何だと跳び起きて、そちらの方を向いていました。これは陸軍の反乱軍が荻窪の渡辺錠太郎教育総監の私邸を襲い、幼い娘の前で殺害した時の銃の音であった。この娘こそ後の渡辺和子、ノートルダム清心女学園学長・理事長である（著書：置かれた場所で咲きなさい等）。これが有名な2・2・6事件である。昭和12年7月小学校入学後に支那事変が起こり、それから6年後昭和16年12月8日に太平洋戦争は始まりました。それは私が小学校5年生の12月の時でした。小学校の若い男先生が壇上で、自分と同じ年の青年がハワイを攻撃したと言って涙を流していました。千島列島単冠湾（ヒトカップ湾）を出発した軍神9人が12月8日特殊潜航艇でハワイのオアフ島を攻撃して大戦果をあげた事でした。一艇に二人乗っているのに、どうして9人と奇数なのか、小学生でも不思議に思いました。国からはこの点何も発表はありませんでした。あとで解った事ですが、ハワイの海岸で潜航艇が打ち上げられ、中の一人が捕虜になった為でした（国はどうして一人が捕虜になったことを知ったのであろうか）。ハワイの海は浅くて水深は12米位しかなく、その上防潜網で湾口は閉ざされており、特殊潜航艇による戦果は殆どありませんでした。この特殊潜航艇を私が America に留学している時に North Carolina で見た事があります。とても大きくて潜水艦と変わらない位に大きな潜航艇でした。



昭和16年12月7日日本海軍が米国ハワイの真珠湾攻撃に使った特殊潜航艇。Virginia, Norfolk 海軍軍港より少し南下した道路際。

主に航空機による、攻撃でした。戦果は上上でしたが、航空母艦は不在でした。此の時すでに日本の機密電文は解読されていて、日本が攻撃することをルーズベルト大統領は知っており航空母艦はオワフ島から離れていました。戦線布告の電報を日本は打ちましたが、日本の陸軍がそれを握りつぶして、時間をずらして America に送ったので結果的には不意打ち戦争になりました。不意打ちは戦国時代以来日本の得意とする戦い方です。America は卑怯な方法で自国がやられたので国民一致こぞって日本に対抗してきました。太平洋戦争の大戦果は開戦後約半年続きました。敵は ABCD ラインと言って、America、British、China、Dutch オランダ、更に Australia を敵に廻しての戦争でした。日本は石油を取得する為にオランダの植民地であった Indonesia を占領して、石油を確保しました。又英国の植民地であった、Singapore を占領しました、そして英国の戦艦 Prince of Wales をマレイ沖で撃沈しました。戦果は花々しかったが、翌 17 年 7 月に Midway に再び航空母艦 4 隻を始めとする海軍攻撃隊が出動しました。どうして Midway に攻撃に行ったのか山本五十六連合艦隊司令長官は此の時すでに、可笑しくなっていたのではないかと思います。自分の考えに反対する者は辞職しろというので誰も反対が出来なかったのではないか。Midway は Hawaii に近い島で、占領しても、Hawaii からいくらかでも攻撃される距離にある上、日本からの補給はどうするのか全く理解に苦しむ処であります。参謀もだれも反対しなかったのでしょうか。此の時に航空母艦四隻を失い、貴重で優秀な pilot を何百人と失いました。司令官は南雲中将で、彼はこの戦以降、Hawaii でも徹底的にやらなかったと山本五十六司令長官の怒りを買って、日本に返してもらえず、直ちにインド洋に行かされ、戦い、最後は南方の島に行かされて日本に返して貰えず、南雲中将は最後に pistol で自殺して死にました。南雲中将は水雷屋だからやらないのだと山本五十六大将は言っていたが、出撃する前に徹底的にやれと言えれば良かったのではないかと思います。点数稼ぎで出世して来た人は、戦いと別に、昇進する為に出世の為の点数を数えたのかもしれません。私が中学に入った 1 ヶ月後に 50Km 行軍というのがありました。13 歳の時です。今小学校を出て 1 カ月経った生徒が出来るでしょうか（我々は実際は 30km 行軍、本当の軍人は 30kg の完全武装で 50km 行軍でした）。私の中学は明星中学と言って、府中にありましたので、夕方 6 時に学校に集合して、5 年生の大迫大隊長を先頭に、6 時半頃出発しました。途中府中の大国玉神社にお参りして一路 1 年生から 5 年生まで、皇居に向かって行軍が始まりました。途中勇ましく軍歌を輪唱しながら行軍をしました。戦地の兵隊さんを思い、水筒の持参はなかったと思います。勿論夜食などは持参禁止です。途中の府中街道で、直径 1 米はある太い樫にしめ縄が貼ってあって、供出と書いてありました。材木が足りないので、一般民間人の木も国の為に出征をしなければならなかったのです。これで船を造るのだなと思いました。鉄類も同じです。何処の家でもお墓の鉄製の扉まで供出しました。多摩墓地に行くとお墓に扉が無いのはそのためです。行軍中上級生の数名は皆より少し先頭を先遣隊として歩き、前方何百米異常ありませんと、伝令が配属将校に報告をしていました。戦地と違うし、府中街道に異常があるわけがないので、可笑しいと思いました。軍隊の練習かと思いました。疲れて来ると 10 分間の小休止がありました。

9 時ごろになると、元氣も失い、眠くなり、疲れてきて、倒れたり、はぐれたりする

と危ないので、4人が互いに腕を組んで、眠りながら歩きました。意識はなく足だけが歩いている状態でした。一人が倒れそうになると、隣の人が引き起こし、歩きました。お互いに眠りながら歩きました。水道道路に来ると、流石くたびれて12時頃明大前駅であったでしょうか、大休止が行われました。大休止とは60分間の休憩です。同級生の一人が、寒くて震えていたので配属将校が、軍服を着せてあげていました。全くグロキーでした。杉並区に住んでいた私は、この辺を勝手知ったように、今吉祥寺の辺だなと思いました。再び行軍が始まり、渋谷近くになると、空も少し明るくなってきましたが、雨模様になり、明治神宮の杜が見え始めた時には土砂降りになり、帽子のつばから、肩から雨が流れるように降り注ぐようになりました。まるで全身びしょびしょになり、先生方は遂に、これ以上は危険と判断して、4、5年生は宮城に行くが3年生以下は水道橋駅で解散になった。水道橋の駅ではその年に入校した幼年学校の生徒等も中止して帰るところであった。家に帰って、風呂に入り、頭からお湯を浴びて、布団に潜って、ぐっすり眠った。午後の3時頃起きだした時、近所の同級生の古宇田君が遊びに来た。そのtuffは今でも驚いている。これが入学当初の軍事訓練である。今の小学校の6年生が卒業して1ヶ月後にこのような強行軍が出来るであろうか。この強行軍の後、山本五十六大将の葬儀があり、我々明星中学生は全員が近くの多磨墓地での葬儀に参列しました。山本五十六大将は昭和18年4月18日に戦死をしたにも拘わらず、全国発表はなく、五月に葬儀が行われたのは少年としても奇意に感じました。後任の連合艦隊司令長官は古賀峯一大将がなりましたが、昭和19年3月31日に飛行艇に乗船中、嵐に会い、殉職をしました。

此の時鞆に入っていた暗号文が海に落ちて、現地人に拾われて、米軍に渡されて、日本海軍の暗号とその後の作戦は全部ばれるようになりましたが、暗号書は大丈夫だとの主張を信じて、変更をしなかったのもので、その後の作戦は全部ばればれになりました。いわば負け戦に続く、不幸の連続になりました。

1年生の時は概ね旧姓中学生らしい、生活を送った。秋の運動会もありました。詩吟部に入り、詩吟を教わった、弓道部にも入った。流石3学期になると、即ち昭和19年の1~3月は世の中が暗くなってきたと友達と話しあった。中学の先生方も退職する先生が多くなってき、休講の日もあった。2年生の6月になり、サイパンが陥落したら、児玉九十校長先生が、朝礼の時にサイパンが占領されたので、日本は大変な事になると言って、涙を流していましたが、私はそんなに大変な事になるとはわかりませんでした。サイパンが日本からどの位遠いのか解らなかつたのです。8月になると静岡県板妻兵舎に軍事訓練に1週間行きました。富士の裾野です。夜中に電柱もない真っ暗な夜中に向こうの方に居る青木少尉(後中尉)が持っている懐中電灯を指して、一人ずつ行く練習であった。勿論街灯、電灯など富士の裾野だからあるわけがない。全員集合したが一人の生徒が戻ってこない。皆で彼の名前を呼びましたが、返事はありませんでした。そのうち本当の兵隊さんに連れられて友達が泣きながら帰って来た。迷って本当の軍隊の兵舎に行ってしまったのである。番兵から誰何をされて、明星中学校の000ですと泣きながら言って、連れてこられたそうです。戦地なら3回誰何をされて返事がない場合は、銃で撃たれます。

宇ですうです。戦地ならば誰何を3回誰か、誰かといわれて返事がない時は撃たれても仕方がないのです。訓練のある日突然配属将校の一人菅中尉が夜中に応召の召集



令状が来て、生徒に別れの挨拶をしたいが、皆疲れて寝ているので、起こすのはかわいそうだと言って、別れの挨拶もせずに行った事を翌日先生から聞きました。きっと行き先は硫黄島であろうと思いました。どうなったか戦死をしたかもしれません。悲しい事です。



明星中学 2 年生時、富士の裾野、板妻兵舎に軍事訓練に行く。最後列中央は管中尉、四人右隣は露木昶担任先生、筆者は最前列右端。

毎晩夜中になり、寝静まるとダニが柱を伝わって列になって降りて来るのが解りません。毎朝痒くてたまりませんでした。途中管中尉には召集令状が来て、生徒に挨拶をして行きたいが、疲れてぐっすり眠っている生徒を起こすのは忍びないと言って、去って行ったと翌日担任の先生から聞きました。きっと硫黄島に行かされて戦死したかもしれませんし、途中で撃沈されて戦死したかもしれません。妻子がいたであろうに、教練の時も淋しそうな顔をしていました。

2 年生になったら、学校で使われていた三八銃が全部本当の軍隊に持って行かれました。銃の生産が足らなくなってきたのです。大変な事だと思いました。サイパンが取られたので、連日空襲がありました。昭和 18 年 11 月いよいよ全国的に文科系大学生の徴兵猶予はなくなり、明治神宮でのあの有名な雨中壮行会が挙行されました。中学生にも工場動員が開始されました。私の中学の 4 年生は 4 月より学校の近くのパッキン工場に動員され、朝早く 8 時から働いているのを通学の度に見ていました。やせた体でよろよろと重いものを運んでいました。パッキン工場はゴム会社で飛行機の車輪のタイヤを作る工場でした。此の 4 年生は 3 年生まで勉強をしていましたが、

4年から工場に行き、翌年5年生への進級はなくて4年生で卒業でした。即ち3年間しか中学で勉強をしていないのです。私達は2年生の11月より府中の東芝工場に行きました。配電盤係、機械工作係、仕上げ係等に分かれまして。或る時機械班で羅旋盤をやっていた同級生の袖が旋盤に巻き込まれて、あわや指、腕が巻き込まれそうになった時に、隣で旋盤をやっていた囚人の朝鮮人（当時はまだ北朝鮮・韓国の名称はありませんでした。朝鮮は日本の植民地であったからです。二つの名称に変わったのは昭和25年以降です）がとっさにbeltを滑車からはずしたので、あわや寸前に指、腕は巻き込まれませんでした。今でもこの朝鮮人には大変感謝しています。太平洋戦争中朝鮮人が徴用されて、ひどい目にあったと騒いでいますが、工場で働いていたわけです。これらの朝鮮人は近くにある府中の刑務所から来た人たちでありましたが、どのような悪いことをした人か知る由もありませんが、皆我々と同じな粗末な待遇で食事も労働も日本人と分け隔てなく、働いていたのです。炭鉱などで働いていた人達は工場よりも過酷な労働であったと思いますが、日本人も朝鮮人も戦争に勝つ為に必死でありました。大人は徴兵、大学生は出征、中学生、女学生は工場動員、15~16歳の少年は少年兵として、軍隊に入り、小学生は勤労働員で草取りとか国の為に戦いました。工場の昼の食事は水トンでした。中に入っているメリケン粉の具がぎゅうと手で握って入れるので、指の痕が見えて、とても食べる気がしませんでした。食べるものがないので、食べる他ありませんでした。ある日外に置いてあったDrum管の中にコールタールが入っているのが解り、誰かが、ススキの茎をそっと突っ込んで、そのコールタールをなめたら、みんな真似をして、舐めて、先生から絶対にそんな事をしてはいけないと言われました。コールタールは甘いのです。当時は最早砂糖はありませんでした。又食堂で長い行列の後ろから食堂を見ると、お赤飯の様に赤いご飯が出ているので、あどこかで戦果があったのだと思いました。食堂に近づくと、お赤飯でなくて、赤い高粱飯でがっかりしたことを憶えています。もうお米も不足の状態でした。別に朝鮮人だからと言って食事に差別はありませんでした。朝鮮人でも優秀な人は軍隊に行き、中には特攻隊に出撃した人もいます。皆日本の国の為です。私の小学校の同級生のお父さんは朝鮮の師団長でありましたが、戦況が不利になると、南方のある島の旅団長で赴任して苦労を重ねました。日本から帰国するように二度ほど言われましたが、自分は帰らず、三回目の最後の飛行機に自分の代わりに朝鮮出身の兵隊を飛行機で内地に返したという事をその息子さん（小学校の同級生）から聞きました。こういう日本軍人もいたのです。帰って来た朝鮮出身のその兵隊は戦後努力して韓国の国会議員になったそうです。勿論この小学校同級生のお父さんは玉碎で戦死をしました。朝鮮を出発する前に書かれた、この師団長による墨痕鮮やかな遺言書が今防衛省の本館に展示されています。

サイパンが陥落してから、飛行機は定期便の様に来ました。サイパンから真っすぐ、北上して、富士山を目指し、富士山頂で右折して、東京都内を西方より侵入してくるのです。府中はまさに都心への入口ですから、空中戦を良く見ました。学校のそばの国分寺の辺です。B29は1万米上空を飛んできます。調布の飛行場から空冷式飛燕が1万米上空に行くには30分かかかるので、あらかじめ警戒警報が鳴った時に、飛び出して、1万米で待機しているそうです。寒くてしょうがないと言っていました。しかし戦う時間は燃料の関係で10分しかないと言っていました。

1万米というとB29は1cm位にみえて、日本の飛行機飛燕は全く見えません。かすかに日本の飛行機はアブが飛んでいるような円弧を描いて飛んでいるようにしか解りません。突如ピッカと光ります。これが体当たりした時です。あー今当ったと思うだけです。B29には何にも起こりません。高度も変えず堂々と飛んで都内に向かって行きます。敵の飛行機はゴムで内張りをしているので、弾は貫かないのです。体当たりしかないので。そのうちすーと1本の線が見えて、やがて8000米位で落下傘が開くのです。あー助かったのだと思いました。帝都に侵入するB29をやつける為に東京の入口の西方で戦っているのです。こういう戦いが私たちの頭の上でやっているのです。一度すごいのを見た事がありました。見ごと急所に当たったのでしょうか、がくと1万米から8000米位に高度が落ちました。そのうちがくん、がくと高度が落ちて5000米位になった時に、翼と胴体が離れて、翼はひらひらと、胴体はまっ坂様に落ちてゆきました。友達の一人があれは保谷方面だと言ったので、皆で走って見に行きました。1時間位走って、現地に着きました。直径50米位のすり鉢型に畑地はけずられ中に胴体などがありました。よく解りませんがもっと現在のひばりが丘の辺ではなかったかと思います。警察の人が先に来て米兵などはいませんでした。西荻窪辺りにも飛行機の補助タンクが落ちてきたことがありました。見に行ったら、裸体の女性の油絵が落ちていました。

一度調布の飛行場で飛行軍曹に将来将校になれるのでしょうかと、私は馬鹿だから、尋ねたら、『今頃そんな事を考えている人は居ないよ』と言われました。その軍曹は三日後に敵B29に体当たりして戦死をしてしまいました。全く馬鹿な事を聞いたものだと思いを反省をしています。

空襲は1日置きにあり、東中野、中野、高円寺、阿佐谷 荻窪の各駅は1日置きにやられ、荻窪の青梅街道の陸橋がやられというので、見に行きました。正確に青梅街道の中央線跨橋がやられぽっかり穴があいているので、敵は正確だなーと思いました。昭和20年頃でしたか、あの頃は毎日のように空襲があるので、気晴らしに4歳の弟を連れて井の頭公園に行こうと思いました。西荻窪駅に行く前に警戒警報が鳴りました。大抵1時間後に空襲警報になるので、それまでは公園に着くであろうと思って駅に向かいましたが、駅に着いたら空襲警報になり急いで、帰宅しました。途中で飛行機がぶんぶんとんできて、これはまずいと思いました。弟をおぶって、帰宅を急ぎましたが、1機のグラマンが向こうから飛んで来たので、隠れる場所もなく、そばの家の門柱に隠れました。玉石で出来た門柱ならば撃たれても貫通しないだろうと思ったのです。相当遠くにいたので、門柱に隠れているのが解らないと思いました。解ったのでしょうか、バリバリと撃って来ました。地上から飛行機を見るのと、飛行機から地上を見るのとでは飛行機からの方がはつきり見えるようです。命拾いをしました。この道に来るといつも思い出すのは此の事と小学校の同級生の母親が一人なので（お父さんは出征中）、空襲警報が鳴った時に、自分の家の防空壕に一人で入るのは心細いので、隣の家防空壕に入った途端、グラマンがその防空壕を直撃し、そのお母さんは死んでしまった事でした。グラマンはお母さんが隠れたのが見えたのでしょうか？

20年の3月になると私の家は高台にあったので、グラマンが編隊を組んで約30度の角度で、三鷹の中島飛行場にどンドン突っ込んで行くがまる見えでした。私の姉は女

学校で三鷹の中島飛行場に勤労働員に行っていました、よくやられなかったと思っています。

家に居た時に一度向こうからグラマンが飛んできたのが見えたので、姿を見せて、さーと 1 米も離れていない鉄製のモーター式井戸に隠れたら、バリバリと撃ってきました。飛行機が去った後に、屋根に登って見たら、私が居た処と同じ場所の瓦何枚かに銃弾の跡が点々と縦についていました。正確だなと思いました。家の近くの広い空き地に高射機関砲の陣地が作られたが、1 回も打たなかったと思います。その隊長が近くの服部医院の院長の自家用車を分捕って、隊長が乗っているのを見た事があるが、当時は gasoline の配給もなく、自動車は無用の長物であったかも知れません。

夜毎に来る空襲警報に慣れてきて、また来たかと思うようになりました。

昭和 20 年 3 月 9 日夜の 11 時頃警戒警報が鳴りました。家では警戒警報が鳴ると、ふかし鍋にサツマイモを沢山入れて、ふかしはじめます。30 分位で出来上がるので、それを持って自宅の庭の防空壕に入ります。

大抵 1 時間ぐらいで空襲警報は解除になるので、終わったら、家でそのサツマイモを皆で食べますが、この日に限って解除になりませんでした。

東を見ると、東の地平線すべてに円弧を描くように真っ赤に燃えている様子が見えました。夜中の 1 時ごろになると、流石眠くなり、防空壕の中で眠り始めました。時間は解りませんが、3 時ごろでしょうか、大分明るくなってきた様でした。何か灰と煤が一杯飛び舞っているようでした。

5 時ごろでしょうか又外に出て見たら、空が一面真黄色で、大きな黒い燃えカスが灰として一杯舞い上がっていました、東の空は真っ赤に染まっていました。大分やられたなと思いました。6 時ごろになると完全に朝になり、空は一面真黄色で大きな黒い燃えかすが舞い飛んでいました。3 時頃夜が明けてきたと思ったのは間違いで、空襲の為黄色い煙が空を舞っていたので明るかったのです。これが有名な 3 月 9~10 日かけての東京下町の絨毯爆撃です。

5 月になりいよいよ残っているのは西荻窪なので危ないと家で相談して私は次男なので母方の新潟の柏崎に疎開をしました。そこで又工場動員でありました。高射砲機関砲の台座にタップを使って、ネジの螺旋を作る作業であった。10kg はある鉄の台座を万力に乗せるのは小さい体で大変でした。1 週間毎に昼用夜交代で働きました。勉強など全くありませんでした。

父の形見として履いて来た上等な靴を係長が見て、家は靴屋で、学生用の良い靴があるから取り換えようと言いましたが、形見なので断りました。

この上等な靴も切り粉でやがてボロボロになりました。末期は工場疎開で、工場を潰して、工場の木材をどこか山に運び工場を造りなおして、そこで軍需品を製造する事になっていました。

8 月 15 日、いつもは 11 時半に仕事を終えて 12 時に昼食であったが、この日に限り、11 時に広場に集合と言われた。12 時に天皇陛下のお言葉があり、あの有名な言葉『耐えがたきを耐え、偲び難を偲び』のお言葉がありましたが、要するに何の意味か解らず、もっと頑張れというのかと思った。結局戦争は負けて終わった事が、裏山に連れて行かれて、担任から聞いて解った。常日頃欲しいと思っていた、小さな grinder を

持って、家に飛ぶようにして帰った。これから自分で死なない限り、いくらでも生きていけるだと思った。現在は今まで生きてこられたお礼に死ぬまで、職業の医者として、その職務に尽くしたいと思っている。

#### (結語)

我々は戦争中ろくに勉強が出来なかった。勉強が出来なかったのは我々中学生ばかりでなく、大学生の文系は軍隊に入れられ、旧制の高等学校に入学した人も授業は一年生限りで二年生から工場に動員され、そのまま二年で卒業、即ち授業を受けたのは一年間だけであった。海兵の予科に昭和20年4月に入校した人達も終戦迄の4か月間講義を受けたのは全部で三週間位であったと聞いている。戦争が終わった時は中学三年生であり、終わったからと言って、すぐに授業が始まったわけではない。先生達は疎開をしていない上、食糧難でろくに先生も、生徒も食えないので、授業は半日で、午後は自宅学習であった。自宅学習と言っても教科書があるわけではなく、解らないところは、解らないまま四年生に進級した。全く学校の体をなしていなかった。中学時代の楽しい授業は英語と漢文位であった。現在は幸福な時代であるから、一生懸命に勉強をするようお願いしたい。勉強をしておけば、それに勝るものはない。何故戦争中我々は頑張ったのかというと、国が取られたら終わりだとの観念があったからです。特攻隊も自分一人が死んで敵艦が一隻でもやられ、敵兵が一人でも日本に上陸しない様にすれば、残った妻子が助かるであろうと思って犠牲になって特攻隊になって行ったのです。一般に飛行機では gasoline タンク、engine 又は操縦士がやられた時は、基地に戻れないので、敵艦に当って自爆するのが普通です。特攻機はこれが高じた戦法でしたが、効果は10%位と言われて、特攻で死んだのは6000人と言われています。効果がないのに特攻機を出したのは軍上層部の『敵を奴っけに行った』の建前だけでした。戦艦大和が最大最後の見本です。海軍は効果もないのが解っていながら立派な青壮年・少年を沢山殺してしまいました。天皇が『連合艦隊はもういないのか』との言葉に答えてやりましたという証拠を作るだけでした。日本は過去に蒙古来襲と、今回の太平洋戦争の2回国が取られそうになった事があった。日露戦争の時は米国に借金をしてロシアと戦い勝ったのだ。ロシアと戦わねば、朝鮮はその後全部ロシアに占領されて、いずれは日本も脅かされるから戦ったのである。満州は勿論、遼東半島、大連、旅順までロシアに占領されていたのである。日露戦争終了時日本の連合艦隊司令長官東郷元帥は『日本は四界海に囲まれているから、常に海防に気を使わねばいけない』と締めくくった。これは今でも大切な言葉である。日本の国を、又尖閣諸島を始めとする島々を外国に取られないように日本は常に四海を見張る事が大切である。今の日本人は国防の観念が全く不足である。

2018年6月1日 緒方 博丸記

この内容の要旨は2018年10月21日神奈川県大和市戦争体験講演会で講演した。